

Jazz Dialogues

#1 桜木紫乃(作家)

海原純子 Junki Uehara

うみはら・じゅんこ 神奈川県生まれ。東京慈恵会医科大学卒業。医学博士、心療内科医、産業医として勤務する傍ら、数多くの著作を執筆、さらにジャズシンガーとしても活躍し、都内各地のジャズクラブ、イベントなどに出演し人気を博している。ジャズアルバム『ロンド』『Then&Now』が発売中。新聞・雑誌など連載も多数。近著に「こころの見方」(毎日新聞出版)「男はなぜこんなに苦しいのか」(朝日新聞出版)「幸福力・幸せを生み出す方法」(潮出版社)、こころの深呼吸(婦人之友社)、「大人の生き方 大人の死に方」(毎日文庫)などがある。

海原純子による「ジャズ対談」がスタート! 直木賞作家 桜木紫乃と交わす「心の対話」

心療内科医で作家・ジャズシンガー海原純子による対談企画。第1回目は、直木賞作家の桜木紫乃氏が登場。数年前に雑誌の企画で意気投合して以来、音楽番組にも一緒に出演するほど親しい間柄の二人。本誌Jazz inの創刊にあたって記念すべき第1回は「ジャズと人生」をテーマに、桜木氏の表現者としての生き方に肉迫する。没迷する現代社会において桜木氏の創作の原動力、そして新しいことに挑戦し続ける精神「ジャズマインド」との共通点とは?
海原純子●文

桜木紫乃さんとは数年前雑誌の対談でお会いして意気投合。紫乃さんが小説を書く以前(紫乃さんの子どものころ、なんていわれてます)ananなどの連載で私を見て、「こんな生き方をしているんだ」と思ったそうで、対談以後もラジオで一緒にしたり紫乃さんの小説を文庫化する時の解説を私が書いたり、私のCDのライナーを紫乃さんをお願いしたりしている関係です。紫乃さんはサックスを練習していてジャズ好きということで、時々音楽番組にも一緒に出演してもらったりしているので、今回はジャズイン創刊記念ということで「ジャズと人生」をテーマにお話ししていただきました。録音とスクリーンショットは私の友人のウェブデザイナーでシンガーの林トモコさんにお手伝いしていただきました。

ジャズマインドで生きる人生

海原 最近新刊でユニークな本が出ましたね。

桜木 写真家とコラボして、30代、50代、70代の女性をそれぞれ主人公にした一冊なんです。1話50枚あるいは100枚のお話になる内容を、ぎゅぎゅっと原稿用紙5枚から6枚にしました。私はサックスのアドリブがものすごい苦手なんですけど、できあがってみると「これはジャズでは」と思った。最初は散文詩の原稿だったんだけど、「小説家なんだから物語で勝負してほしい」という要望があって、それまでイメージしていたものをがらりと変えました。小説家、写真家、デザイナーが全力で取り組んで「クリスマスに誰かにプレゼントしたくなる本にしよう」が目標でした。私は普段はいつもひとりてこつこつ原稿を書いて、ソロプレーなんです。編集者も絡むけど基本はソロプレー。けど今回のフォトストーリーは全く違って、誰も妥協しないで作ったコラボ作品になったの。もしかしてこれは、純子さんがよく仰っているジャズのセッションに似ているのでは、と思いました。ジャズのセッションってそんな感じじゃないですか?

海原 確かに真剣にやるジャズセッションはそうなりますね。結構言いたいこと言うし。自分の全力を出して妥協しない中でコラボしてますよね。

桜木 全力でやるって気持ちいいですよ。

海原 できることを70%くらいの力でやるのは慣れたお仕事モードで疲れないけど退屈でもある。でも新しい挑戦をして120%くらいの力を出し切ってするのは気持ちいいしそれがジャズですよ。短編小説1冊分を5枚ずつの3話に凝縮したフォトストーリーは新しい形の本で、音楽ではないがジャズしてますね。

桜木 今回の本は、正直、全員全くお金にならないことをやっただと思うの(笑)。それだけに、全力出さないと恥ずかしかったし、持ち出しも全力(笑)。

桜木紫乃 Shino Sakuragi

さくらぎ・しの 北海道釧路市生まれ。2002年「雪虫」でオール讀物新人賞を受賞。2007年に同作を収録した単行本『氷平線』(文藝春秋)でデビューする。2013年には『ラブレス』(新潮社)で島清恋愛文学賞を受賞し、同年『ホテルローヤル』(集英社)で直木賞を受賞、ベストセラーとなる。2020年には『家族じまい』で第15回中央公論文芸賞を受賞。近著に『胡蝶の城』(新潮社)『ヒロイン』(毎日新聞出版)『俺と師匠とブルーボーイとストリッパー』(角川書店)などがある。今年10月に自身初となるフォトストーリー『彼女たち』(角川書店)を上梓した。